小学校5年生時の遊び経験と青年期の社会性との関連 (4)

ーレジリエンスに影響を与える要因ー

○伊藤崇達¹・光浪睦美²・王 松³・久木山健一⁴・神藤貴昭⁵・門田幸太郎⁵・小石寛文⁶
 (¹京都教育大学・²神戸学院大学・³神戸女子大学・⁴九州産業大学・⁵立命館大学・⁶神戸大学)
 キーワード: ギャング的遊び経験, リーダーシップ, 社会的スキル, レジリエンス

Relationships between play experiences in fifth grade and social skills in adolescence (4)

Takamichi ITO¹, Mutsumi MITSUNAMI², Song WANG³, Ken'ichi KUKIYAMA⁴, Takaaki SHINTO⁵, Kotaro MONDEN⁵ and Hirofumi KOISHI⁶
 (¹Kyoto University of Education, ²Kobe Gakuin University, ³Kobe Women's University, ⁴Kyushu Sangyo University, ⁵Ritsumeikan University, ⁶Kobe University)

Key words: Play experiences in Gang age, Leadership, Social skills, Resilience

問題と目的

社会性の発達,あるいは社会的スキルの獲得を促すためには,幼少期から続く,それぞれの発達段階に応じた適切な対人関係経験が重要な要因となるであろう。とくにおとなから距離を取り始めるギャング・エイジといわれる時期では,自分たちだけの力で集団を維持していく要求が強くなる。それらの経験が社会的スキルの獲得を促すことになるであろう。一方で仲間関係を維持していくために,自己コントロールすることが求められ,我慢しなければならないことも多く経験をするであろう。そのことから,仲間とのかかわりはレジリエンスの獲得を促すではないかと考えられる。本研究では,小学5年生の頃,いわゆるギャング・エイジといわれている時期に,仲間とかわる遊び経験が,青年期の社会的スキルの獲得やレジリエンスの獲得に影響しているかどうかについて検討する。

具体的には,「小学校5年生時の遊び経験と青年期の社会性との関連(3)」で得られた結果にもとづいて,以下の仮説を検証することを目的とする。仮説1:小学校5年生時のギャング的遊び経験が社会的スキルやリーダーシップへの自信に影響するであろう。仮説2:それらの要因が青年期のレジリエンスの高さに影響するであろう。

方 法

被調査者 上記の研究(3)と同様であるが,分析対象としては,欠損値のないもののみにしたため,全体は609名,男性284名,女性325名であった。

質問項目 研究(3)と同様である。

結果と考察

本分析対象者について,各尺度,各因子の全体と男女別の平均と標準偏差および性差の検定結果を示したものがTable1である。「ギャング的遊び経験」では,自主的な行動が男性の方が高かった。一方,「リーダー」では,「親しい集団」でも「親しくない集団」でも女性の方が高かった。

本研究では,構造方程式モデリングによるパス解析を行った(Fig.参照)。「ギャング的遊び経験」については3因子が得られたが,因子によって項目数が少ないために因子ごとに見るのではなく,まとめて「ギャング的遊び経験」として分析することにした。また,「社会的スキル」においても2因子抽出されたが,「配慮的スキル」の α 係数がやや低かったので2因子に分けずに全体を合計したものを「社会的スキル」として分析した。また,リーダーシップに関しては,「お互いが親しい集団で活動するとき(親しい集団)」と「あまり親しくない集団で活動するとき(親しくない集団)」とに分けて分析を行った。

従属変数としては,レジリエンスを「困難な出来事が起こったときでも,可能な限り自分の力で,粘り強く対処できる」というようなできるだけ自分の力で対処する項目を「自力レジリエンス」とし,「困難な出来事が起こったときでも,誰かの力を借りて,粘り強く対処できる」というような誰かの力を借りて対処する項目を「他力レジリエンス」とした。

全体についての結果がFig.1である。この結果から,小学5年生頃の「ギャング的遊び経験」が青年期の「社会的スキル」や「親しい集団」と「親しくない集団」での「リーダー」への自信にも影響し,さらに「社会的スキル」と親しさの異なる2

つの「リーダー」への自信は「自力レジリエンス」にも「他力レジリエンス」にも影響するという結果となった。また,小学5年生頃の「ギャング的遊び経験」は直接的に現在の「レジリエンス」に影響していないという結果であった。

性差を検討するために多母集団同時分析を行った。その結果がFig.2に示すとおりである。全体として男女で差があり見られないが,女性の方が「社会的スキル」から「自力レジリエンス」へのパス係数の値が大きく,男性の方で「親しくない集団」でのリーダーの自信から「他力レジリエンス」に対して正のパスが示され,有意差がみられた。

尺度の因子も含めて,性差がどのような要因に由来するかについてさらに検討が必要である。

Table1 各尺度と各因子の平均とSDおよび性差の検定結果

	全体 (n=609)		男性 (n=284)		女性 (n=325)		男女差
	M	SD	M	SD	M	SD	
集団の行動	2.55	.93	2.50	.94	2.59	.91	1.21
自主的行動	3.17	1.05	3.31	1.02	3.05	1.06	3.09 **
異年齢行動	2.59	1.20	2.64	1.21	2.55	1.19	.85
ギャング合計	2.75	.71	2.79	.74	2.73	.69	1.00
積極的処理スキル	3.14	.79	3.16	.83	3.12	.76	.62
配慮的処理スキル	3.96	.68	3.91	.73	4.00	.64	1.57
社会的スキル合計	3.45	.64	3.44	.67	3.45	.61	1.60
リーダー(親しい)	3.70	.82	3.64	.87	3.76	.77	1.84 †
リーダー(親しくない)	2.83	.94	2.76	.95	2.89	.93	1.71 †
リーダー合計	3.26	.77	3.20	.80	3.32	.73	2.03 *
自力レジリエンス	3.55	.80	3.53	.81	3.56	.80	5.40
他力レジリエンス	3.39	.84	3.34	.87	3.43	.82	1.34

** $p<.001$, * $p<.05$, † $p<.10$